

熊野古道と伊勢路

2009年5月30日(土)

千里金蘭大学

寺口瑞生

<http://teraguchi.net/>

私は地域社会学を専門とし、「都市と農村の関係」や「まちづくり」の実態を調べることを仕事としております。その関係で、都市部から離れた農山漁村や過疎地域へ出かけることが多く、とりわけ紀伊半島を主な研究フィールドとしています。

少し前までこのような地域は、「自然が豊か」ではあるが「不便な遅れが何もない」という類の形容詞で紹介されることが一般的でした。しかし、経済合理性だけが豊かさの物差しではないという機運が広まる中、自分たちの地域を見直す取り組みが各地で実践されています。

2004年7月に「紀伊半島の霊場と参詣道」が世界遺産に登録されました。この参詣道の一部は「熊野古道」として知られるところであり、ここ数年「ブーム」と言っていほどにこの参詣道を歩く人が増えています。ところがこの歴史ある道は、実は近年になって再創造された道でもあるのです。

私は三重県南部の過疎地域(=東紀州地域、奥熊野地域)がどうすれば元気になるか、という官民あげでの取り組み(=東紀州地域活性化事業)に、10数年間関わってきています。行政機関や民間の人たちが一体となって、自分たちの地域に誇りを取り戻そうとするその試みの成果の一つとして、熊野古道(伊勢路)が現在によみがえったのです。

熊野古道とは、熊野三山にお参りする人たちが歩いた道ですが、大阪から和歌山を渡る「紀伊路」は従来からよく知られていました。しかし、伊勢神宮から熊野をめざす「伊勢路」については、生活道路として近年まで利用されてはいても、それが「熊野へ通ずる道」というとらえ方は(地元では)あまり一般的ではありませんでした。地元の人々の地域を見直す視線は、その歴史的意味を取り戻して、地域の宝を改めて獲得したのです。

本日は、熊野古道を含む紀伊半島が「紀伊半島の霊場と参詣道」という名称で世界遺産に登録されるまでのプロセスをお話しさせていただき、地域再発見の楽しさの一端もお伝えできれば幸いです。

【参考文献】

小山靖憲『熊野古道』(岩波新書、2000年4月)

五来重『熊野詣 三山信仰と文化』(講談社学術文庫、2004年12月)

神坂次郎『藤原定家の熊野御幸』(角川ソフィア文庫、2006年8月)

みえ熊野学研究誌シリーズ(既刊9冊) <http://higashikishu.org/kenkyuushi.shtml>